

【カマタマーレ讃岐賞】

相互理解するために

高松市立香東中学校 三年 山崎千春

私は、数年前から聴覚過敏に悩まされている。聴覚過敏とは、音を敏感に感じとってしまい、その音が苦痛に感じる症状のことだ。私はこの症状のせいで、音があふれている場所、例えばショッピングモールや映画館に行くことができなかった。その反面、私はこの症状のおかげで人の優しさに触れることができた。

それは、学校でのことだ。私は音楽の授業や休み時間が苦手だ。大きな音があちらこちらから聞こえて、どうしようもなく混乱してしまう。そんな時、学校の先生や友だちは私を気遣ってくれる。保健室に連れていってくれたり、体調を気遣ってくれたり、彼らがしてくれることは様々だ。中でも私が一番嬉しかったことがある。

それは、私が音を遮断するためにヘッドホンをつけていたときのことだ。私は学校でヘッドホンをつけることに抵抗があった。周りからどんな目で見られるかわからないからだ。奇異の目で見られることを覚悟して、私は教室でヘッドホンをつけた。すると、意外な反応が返ってきた。「似合ってるね。」私はその言葉にきよんとした。本当に意外な言葉だった。その後、他の友だちも「似合ってるね。」「かわいいね。」といった言葉をかけてくれた。私は、すごく嬉しかった。奇異の目など一切なく、ただ受け入れて褒めてくれた。特に気を遣っている様子もない。そのことが私にとってどれだけ大きなことだったことか。

今でこそ前向きな気持ちになれているが、私は最初、聴覚過敏の症状を恨んだ。

私は放送部に入っていた。放送部の活動をしている教室では音があ

ふれている。せつかく好きになった放送部の活動も、私にとっては苦痛を感じるようになってしまった。そのことが苦しくて、ただ悲しかった。学校に行くことが辛い時期もあって、人数が少なく比較的静かな学校に転校したこともあった。

たくさん悔しいこともあったけれど、私は聴覚過敏の症状のおかげで人の温かさに触れることができた。この体験は私にとってとても大きなものだったし、これからもずっと覚えていられるだろう。放送部を離れたことも、他の趣味を見つけないことにつながった。転校すると友だちも増えて、より人の温かさに触れられた。悪いことばかりではなく、それ以上にいいこともあったのだ。この作文を書いていて、そのことに気づくことができた。私は今、前を向けているような気がする。

一方で、現在では感覚過敏の人が快適に過ごすための取り組みを行っているショッピングモールがある。日時を絞って、放送を止めたり、照明を暗くしたりする取り組みだ。私はショッピングモール内のBGMや放送の音が苦手だ。だから、この取り組みは、私にとってはすごく嬉しいものだ。実際に取り組みをしているショッピングモールには行ったことがない。しかし、感覚過敏の人のことを考えた取り組みがされているという事実には、心が温まる。

世間では、感覚過敏以外に対しても取り組みを行っている。私には印象に残っている取り組みがある。それは、エスカレーターの乗り方についてだ。世の中には病気や障害により、右側に立たざるを得ない人がいる。そのために、右側を空けなければならぬという習慣をなくすというのだ。

私はこの取り組みを知って、少し驚いた。私には想像できないことだったからだ。今まで私はエスカレーターで不便を感じることはなかった。しかし、日常の些細なことで不便を感じることもあるのだ。私はこの取り組みを知って驚いた経験から、これからはより色々な立場

から物事を見てみようと思った。世の中には本当にたくさんの人がいて、抱えているものも様々だ。私はそのたくさんの人の中のほんの一部で、分からないことも多いのだということを書いて知らされた。

だからこそ、私だけでなく、感覚過敏以外の『人と違うこと』をもった人たちも前を向いてほしい。そのためには、たくさんの方の助けが必要だ。一人ひとりのことを想って、自分に何ができるのか考えなくてはいならない。世の中でも、前述したような取り組みが増えていくといいなと思う。それは難しいことだが、当事者自身も声を上げることで、実現するだろう。

私は、昔の私のように暗い闇に沈んでいる人を見逃さないようにしたい。私がしてもらったことを、いつか誰かに返せる日が来ることを望んでいる。世の中には、様々な人がいる。たとえその人を理解できなくても、理解しようと努力すること。そして、自分にできることは何かと考えることが大切なのではないだろうか。私は私にできることを考え、私が受けた優しさを多くの人に返したい。そして、その輪がこれからどんどん広まっていけばいいなと思う。